



Title	内陸アジア言語の研究 XXX 献辞
Author(s)	
Citation	内陸アジア言語の研究. 2015, 30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70108
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

献辞

『内陸アジア言語の研究』の第30号は、吉田豊先生ならびに荒川正晴先生の還暦記念特集号である。吉田先生は、本誌が第7号（1992年刊）から第8号（1993年刊）にかけて廃刊の危機に直面した際に、森安孝夫先生（現大阪大学名誉教授）と共に、本誌の出版継続に奔走していただいた中興の功労者の一人である。また、吉田先生には第8号より責任編集としてご尽力いただいている。まさに、本誌の育ての親の一人と言える存在である。一方、荒川正晴先生には、第25号（2010年刊）より責任編集に加わっていただき、長年本誌の出版を支えていただいた森安孝夫先生の後を受けて、大阪大学を拠点に本誌の出版事業の継続にお力添えをいただいている。本誌が第30号の節目を迎えるにあたり、今号の編集に責任を負う我々は、本誌の出版に対する両先生の多大な貢献に感謝し、第30号を還暦記念特集号として両先生に献ずることとしたい。

本記念号では、編集に当って両先生の学問にゆかりの深い方々に寄稿を呼びかけ、多彩な論考を取り揃えることとなった。両先生と親しくされている研究者や、両先生から指導を受けた学生は非常に多く、全ての方々から稿を募ることは不可能であった。そこで、両先生から薫陶をうけた研究者の一部と、特に交流が深く専門分野も近い国内外の研究者の方々に限って、寄稿をお願いした。その結果、本記念号の掲載論文は、本誌としてはかつてない全12編の大部なものとなった。寄稿された論文の分野は、言語学、文献学、美術史学、歴史学と多岐にわたる。このような多様な論考が本号に集ったことは、両先生の研究領域の広さやその影響の深さを物語っている。

以下に、両先生の経歴について、ごく簡単に紹介したい。

まず、吉田豊先生は、1954年10月11日に石川県珠洲市に生まれ、地元の飯田高校を卒業後、京都大学に進学された。京都大学では、文学部から大学院へ進学され、1983年3月に同研究科博士課程（言語学専攻）を単位修得退学されている。なお、博士課程在学中の1981年10月から翌年9月まで、ロンドン大学アジア・アフリカ学院に留学されている。その後、1986年に四天王寺国際仏教大学に専任講師として就任された。1988年には神戸市外国語大学に助教授として赴任し、1999年に教授に昇進された。2006年には京都大学文学研究科の教授として転出し、現在に至っている。なお、2014年には長年の研究の功績によって英国学士院客員会員（British Academy, Corresponding Fellow）に選出されている。

次に、荒川正晴先生は、1955年1月9日に東京都渋谷区に生まれ、都立戸山高校を卒業後、早稲田大学に進学された。早稲田大学では東洋史を専攻され、文学部から大学院に進学し、1986年に早稲田大学大学院文学研究科博士課程を単位取得のうえ満期退学された。その後、1996年に大阪大学大学院文学研究科助教授に着任、2001年に教授に昇進され、現在に至っている。

両先生の研究業績については、本号巻末の浩瀚な業績目録が雄弁に語っていると思われるので、ここでは特筆すべき点に絞って紹介したい。

まず、吉田豊先生は、ソグド語文献の解読研究の面で大きな功績を残されている。欧州、中国、モンゴル、日本等に散在するソグド語文献を丹念に調査解読され、着実に業績を積み上げておられる。とりわけ、日本に保管されている中世イラン語資料の把握と研究については、ご自身の使命として情熱を傾けてこられた。研究対象とするソグド語資料は写本から碑文まで多岐にわたり、欧州の所蔵機関からモンゴルの原野まで、文字通り世界を股にかける活躍を続けておられる。

また、漢字表記されたソグド語研究の分野でも際立った貢献をされている。とりわけ、長年議論が続いていた「薩宝」の原語をソグド語古代書簡の中の s'rtp'w に比定されたこと、そして「昭武」の原語がエフタル語に由来するとみられる c'mwk であることを明らかにされたことは、特筆に値する。

さらに、近年ではマニ教絵画資料の研究の分野でも大きな足跡を残されている。2009年に、吉田先生は日本の大和文華館が所蔵し「六道図」と呼ばれていた絵画がマニ教絵画であることを立証し、世界中のマニ教研究者を驚愕させた。そして、これを契機に同様のマニ教絵画が日本で次々に確認され、大きな研究の潮流が生じた。この発見はマニ教教義に関する深い知識がなければ不可能なことであり、吉田先生の学識の非凡さを表しているといえる。

これに加えて、吉田先生が誠実で中身の濃い書評を提供されてきたことも重要な業績である。吉田先生は、欧米の著名な学術誌からソグド語やバクトリア語などに関する文献の書評をしばしば依頼されている。このことは、内容紹介にとどまらず、具体的な修正案の提示、関連資料の追加など、常に中身のぎっしりつまった書評を発表してこられたことへの評価と信頼の現れである。

次に、荒川正晴先生の業績を語る上で欠くことのできないものは、6～8世紀頃の中央アジアにおける交通・交易の研究である。この時代は、中央アジアに新たな支配秩序が形成される転換期であり、それに伴い中央アジアの交通・交易をめぐる環境も大きく変容した。従来、この問題は単に中国王朝の西域経営史あるいは中央アジア史の文脈で扱われることが多かった。これに対し、荒川先生は緻密な文書分析に基づきながら、ユーラシア史の視点でこの地域の交通・交易を大きく捉え直す研究を発表されてきた。一例をあげれば、本誌第9号に寄せられた論考では、烏駱(古代トルコ語の *ulay*)を手がかりに、西突厥可汗の権威のもとに中央アジアに、オアシス地域と草原地域とを包括する統一的な交通システムが機能していたことを明らかにされている。また、オアシス国家と遊牧国家との共生関係を使節の往来とその応接のあり方から追求し、このような遣り取りが遊牧国家による片利的な取奪ではなく、オアシス国家側が望む活発な交通・交易をも生み出す双利的なものであったことを指摘されている。ここで示された共生のモデルは中央ユーラシア史全体に関わる普遍性をもった重要なモデルである。

また、様々な非漢人集団、とりわけソグド人の活動に関する研究について大きな功績をあげておられる。たとえば、吉田豊先生がその原語を明らかにされた薩宝の性格については、当初のキャラヴァンリーダー・聚落の統率者

という役目から、ソグド人が唐帝国に取り込まれる過程で祇教の統括者として聚落を支える立場に変化することを最初に明らかにされた。そして、唐帝国におけるソグド人の位置づけについても、唐帝国が帝国の内外を活発に移動するソグド人たちに、「興胡」などの身分肩書を与え、その交易活動を容認するとともに、彼らを唐帝国の流通経済に取り込んでいった実態を明らかにされている。

さらに、荒川先生は、日本においてトゥルフアン文書研究をリードしてきた研究者の一人でもある。荒川先生のご研究は、その多くが中央アジア出土文書の緻密な分析に基づいており、なかでもトゥルフアン文書が研究の大きなウェイトを占めている。とりわけ、1980年代から本格的に利用が可能になった新中国成立以後に発見された文書の研究にいち早く取り組まれ、その成果を着実に発表し続けておられる。

両先生のご研究は多方面にわたるが共通する点も少なくない。まず、具体的な研究対象としては、ユーラシア東部の歴史に大きな影響を与えたソグド人を対象とされていることがあげられる。また、言語や文書の外にある現実に対する鋭い洞察力をお持ちであることも両先生に共通している。そして、柔軟な発想力を駆使し、スケールの大きな学説を自由に組み立てておられる点にも通じるところがある。

最後に、後進の立場から両先生のお人柄に触れておきたい。まず、お二人とも明るく飾らないお人柄で、それぞれ斯界の第一人者であるにも関わらず、我々のような若輩にも分け隔てなく接して下さっている。また、お二人が学会、研究会、調査旅行などの場で見せる、真剣で友情に満ちた遣り取りには、学問の志を同じくする者同士の付き合いの愉快さがあふれている。我々が、異分野の学者たちが本当に面白いと思うことを共有し力を合わせることを当たり前のことと感じるのも、両先生の水魚の交わりの御陰である。

以上、吉田豊先生ならびに荒川正晴先生の経歴、業績、お人柄を簡単に紹介して両先生への献辞としたい。